題名：自然共生サイト「柞の森」への取材・地上波 FM ラジオおよびポッドキャスト配信

日本列島各地で真夏日が続く令和 6 年 8 月 22 日、環境省の自然共生サイト広報大使でフリーアナウンサーの高橋万里恵さんと苗木生産会社 株式会社グリーンエルム代表取締役社長で里山 ZERO BASE プロジェクトに取り組む林学博士“ドクトル西野”こと西野文貴さんが、interfm「Sato Note」特別番組の取材で能登半島先端にある石川県珠洲市を訪れました。

2 人が向かったのは能登の里山の中、石川県で今は唯一炭焼きを専業とする珠洲市東山中町の株式会社ノトハハソ。2030 年までに陸と海の 30%以上を健全な生態系として効果的に保全する世界目標「30by30」の実現に向けて、環境省は 2023 年度から企業の森や里山、都市の緑地など「民間の取り組み等によって生物多様性の保全が図られている区域」を「自然共生サイト」と認定する取り組みをスタートしました。初年度に全国で 184 ヶ所認定されたうちの 1 つが、ノトハハソの手がける「柞の森（クヌギ植林地)」です。高橋さんと西野さんは 2002 年 4 月に大野製炭工場を現在の名称に変更し、法人化した現代表取締役の大野長一郎さんにお会いしました。

ノトハハソが手仕事で生産するのはナラ・クヌギなどの炭であり、BBQ・茶道・囲炉裏・火鉢などに対応していますが、炭を作って販売することにとどまらず、炭製品を通じて持続可能なライフスタイルを提供することを目指しています。そのために大野さんは 20 年前からクヌギの植林も始め、炭焼きを生業の中心とした集落の存続プラン「炭やきビレッジ構想」を掲げています。古来より日本人はコナラなどの広葉樹を薪や炭に使ってきました。秋に伐採した木の切株に翌年の春には新芽が出て、数年が経つとまた伐ることが出来ます。大野さんは、そんな繰り返し自然の恵みをもたらしてくれる森を大切に守り、子孫へと繋いできた暮らしを、いま一度大切にしたいと考えたからです。柞（ははそ）とはコナラ・クヌギ類の総称で能登では恵みをもたらしてくれる森にある木々。それが社名ノトハハソの由来です。

しかし、2024 年の元日に起こった能登半島地震は、株式会社ノトハハソに大きな被害をもたらしました。今回の取材で 1 号窯と 2 号窯がある建屋に入った高橋さんと西野さんが目にしたのは、壊れてしまった炭焼き窯です。本来なら直径 1m50cm、内部で作業ができるよう高さ最大 1m80cm ほどもある窯は、木の階段を上がって見下ろすと 1 つはドーム部分が跡形もなくなり、もう 1 つはドーム部分に穴が空いていて内部が見えました。

大野さんが当時のことを振り返って説明して下さいました。「1 回目の揺れのあと、家族の安全を確認してからここへ来ました。炭を出し終わって中には何もなかった 1 号窯は、天井が完全に崩落していました。部分崩落している隣の 2 号窯は、当日の朝に炭が焼き上がって火を止めたばかりで、通常は火を止めてから空気を遮断して 1 週間かけて消火・冷却するんですけど、部分崩落したことで空気が入って穴や割れ目から火柱が上がっていました。」大野さんが指差す建屋の天井を見ると、ビニール製のトタンが溶けて垂れ下がっています。「隣の棟には 3 号窯と 4 号窯があって、3 号窯も 1 号窯と同じように全部崩落。作りかけの 4 号窯は地面の亀裂に沿って壁が割れていました。」と大野さん。3 号窯には焼き上がって冷却期間も終わって取り出すだけの炭が入っていましたが、崩落で窯の土をかぶってしまったため、今は炭と土を選り分ける作業をしているところです。

炭焼き窯と工場の今後について、大野さんは現在どうするべきか思案しています。能登地方では 2022 年と 2023 年にも大きな地震があって、これが 3 度目の被災です。今回の被害はこれまでとは比べ物にならないほど甚大で作業再開はとてつもない困難が伴います。

まず、炭焼き窯は 600°から 800°という高温になるため、材料が普通の土だと縮んでひび割れてしまうので、最適なのは「焼土」と呼ばれる、かつて炭を焼いていた窯の土です。ノトハハソの窯は、大野さんの父親が創業時に焼土を集めて来て作ったものです。しかし、今回の被災で大切な土に炭や異物が混じってしまいました。大野さんは、「母にすごく細かい粒度で土を選り分けてもらって大切に保管している状況です。」と説明して下さいました。

さらに再び窯をつくることにも膨大な労力がかかるといいます。「炭焼き窯は空気を遮断できるよう機密性が非常に重要で、ひびが入らないようにしなければいけません。そこで、繰り返し直径 10cm ぐらいの棒で叩いて 30cm の土の厚さを半分の 15cm ほどにまでします。」今回の地震は工場の位置さえ大きく変えてしまいました。いつまた地震に襲われないとも限らない中で、この場所でいいのか？この方法でいいのか？大野さんは模索しています。

そんなノトハハソの現状を伺ったあとでクルマに乗って向かったのは、山間部にある大野さんが最初にクヌギの苗を植林した「柞の森」始まりの場所です。元は耕作放棄地だったここに、里山保全を目的としたNPO法人や地元中学生などボランティアの力を借りて植林しました。その数は約7千本。土づくり・雪おこし作業・草刈り・下枝落としなどの継続的な育林作業も行ない、7〜8年ごとに伐採できるクヌギを高価格で流通する茶道用木炭などの炭製品にしています。

大野さんが森について「2004 年の春に植えたので 2012 年に 1 回目の伐採があって、その 7 年後の 2019 年に 2 回目の伐採があって、見てもらっているのは 2 回目の伐採から 5 年が経ったクヌギです。」と話して下さいました。それを聞いて不思議そうな顔をした高橋さんに西野さんが説明します。「植林、伐採と聞くと一度切ったら新しく苗を植え直すと思うかもしれませんが、そうではありません。育った木を地上 15cm ぐらいのところで切ると、切り株の横から新しい芽が出てきます。それをまた 8 年経ったら切るというわけです」「1 回苗木を植えたら、もう同じ場所には植えなくていいってことですね！」と植林の意味を理解する高橋さんでした。

高橋さんの「植林を始めて 20 年が経ち、感じている変化はありますか？」という質問に対する大野さんの答えは土の変化でした。「今は緑に覆われていますが、植林当初は珠洲特有の珪藻土でゴロゴロとした土地でした。植物や昆虫の活動でふわふわ、ふかふかな土になったと感じています西野さんが驚いたのは目に入る草花でした。クヌギ林の外には外来種がちらほらあるそうですが、林の中はほぼ在来種で自分たちのゾーンを作っているのだそうです。「あの青い花はツリガネニンジン。それからフキ・ヘクソカズラ、フジ、ノブドウ、ツゲの仲間、ヨモギ・・・　どんどん言っていくと 2、30 種類を余裕で超えちゃうと思いますよ（笑)」とちょっと興奮気味のドクトル。「こういう場所でクヌギを植林して、きちんと管理して、自然と向き合っていれば、これだけ地域に適した色んな草花が生えて、そうすれば虫が多くなって、鳥も増えてという生物多様性が生まれるんですね！」「植林したあとで 8 年ごとに伐採して、使って、どんどんいろんなものを廻していく中で地域の自然も良くなって、この 1 セットがパックになっている感じがします。ただクヌギが成長しているだけじゃないっていう。きっと地域のみなさんの考え方や関わり方や気持が少しずつ変わってきているんじゃないか、成長しているんじゃないかとも感じます！」と感心しきりです。実際、大野さんによると静観していた周囲の方が黙ってクヌギを植林してくれるということも出てきているそうです。それに気づいて「僕のために植えてくれたんですか？」と尋ねると「いやいや、椎茸やるがに。」と答えるのに、大きくなった頃に「お前、アレはよ切れや。」と言われるという「そんなツンデレなことが起きています。」と大野さんは嬉しそうに笑っていました。

林の中を歩く大野さんが突然「もう８月終わりだからクワガタはいないかな。８月前半ぐらいまでなんですよ。」と言いながらクヌギの木を蹴飛ばし始めました。と、そこに落ちてきた１匹の可愛いメスのクワガタ。「かわいい〜。」と高橋さんと西野さん。大野さんは言います。「こうした環境を授業の一環で地元の子どもに伝え、共生サイトを維持して広げていく活動をやっていけたらと思います。教育と同時に、みんなで掲げた目標を達成しようとなるように、学びの中で自然との付き合い方や利用できる植物を知ることは、何かあった時に役立つかもしれない。そんなことができたらいいと思っているんですが、僕に主宰する力はないので、ぜひ協力者を求む！って感じです。」西野さんが続けて「理念は一緒です。僕も森や山を作っている中で、自然は凄いパワーを持っているけど恐ろしい事もあると伝え、それならどうやって自然と付き合っていくべきか子供と一緒に考える機会を作りたいと思っています。ここは集落の生業を助ける場であり、教育の場であり、コミュニティの関係性が生まれる場になる。物凄く可能性があるものを大野さんは作っているんだと、この場に立ってみて感じます。」と共感していました。

「今回の能登半島地震では、生活すらままならなくなってしまった方、地元を出ていくことも余儀なくされてしまった方がたくさんいて、自分はまだいいほうなんだから復興の先陣を切る役割を果たさなきゃいけないのにっていう・・・今はジレンマの最中にある感じですね。」と大野さんは言います。それはノトハハソの復活には前途の険しさがあると同時に、自分たちの次の復興は震災前からあった課題をも一気に解決するものでなければ、目指す持続可能な社会の実現は出来ないと考えているからです。

大野さんの集落は何もしなければ少子高齢化による過疎化が進み消滅すると考えられる地域で「炭やきビレッジ構想」は、それを食い止めるための計画です。植林し、育て、生物多様性と自然資源が豊かな環境を作り、その中で日本の伝統文化に根づいた炭焼きをして、生産した炭製品は付加価値の高いものとして全国に販売します。炭焼き職人にとってはそれが生業となり、周囲の住人も炭焼きを手伝う、土地を提供する、クヌギ林の手入れをするといったことで生計が立てられる、あるいは生計の助けになる、そんなビジョンを描いているのです。

一方で大野さんが今回の震災前から取り組んでいたのが、自分たちの集落が目的地になる企業研修や観光教育の商品ツアーをつくることです。「この土地に来てもらい、見てもらい、話を聞いてもらったことで、地域の価値を高く感じてもらえるようになったと思います。」と話す大野さんに「確実にそうです。」と深く頷く高橋さんと西野さん。「そういう意味で県内唯一、世界とローカルの営みが繋がっている自然共生サイトの認定地となり、OECM データベースに登録されたことは大きなメリットです。これを地域住民と共有して、炭やきビレッジ構想を主軸に持続可能な集落を作り未来に繋げていきたいと思っています。」と大野さんは話して下さいました。

高橋さんと西野さんがインタビューを通して感じたのは大野さんの地域共生への思いです。最初に見た震災で崩落してしまった窯とそこに残った炭、震災後も成長するクヌギ。2 人が目にした光景からは、大野さんがそれら全てにいかに心を込めてきたかが伝わってきました。

「僕らに伝わるということは、次の世代にも伝わっていくのだろうと感じます。」と感想を伝えた西野さんに、大野さんは最後こう話して下さいました。「価値観の多様化の中で、さらに感性を磨いて、価値を生み出す力がないといけない時代になると思います。それに先んじて、時間をかけて重ねてきたこの過程は、なかなか真似することは出来ません。そこに普遍性を生み出していけたら持続可能になっていくのではないかと期待しています。」

株式会社ノトハハソ公式サイト
https://www.noto-hahaso.com
株式会社ノトハハソ　地震災害支援金のお願い
https://noto-funding.net/184

自然共生サイト等の国際的なデータベースへの登録について(OECM)
https://www.env.go.jp/press/press_03264.html

特別番組「Sato Note」番組ページ
https://audee.jp/program/show/100000496